言葉の種の散らばる性

ジャック・デリダ『哲学のナショナリズム』合評会に寄せて

串田純一

今回日本語訳が出版された本書、ジャック・デリダ『哲学のナショナリズム』[1]を読み、そしてその射程をさらに探ろうと試みる時――私たちは現にそうしようとしているわけだが――最も気になる事柄の一つはやはり、その主な読解対象であるハイデガーの側がまず動物（あるいはより一般に人間以外の生物）の「Geschlecht」に関して何を言っているのか、という点であろう。そして、よく知られた 1929 年冬の講義『形而上学の根本諸概念』であればこの問題に触れていてもおかしくないと思われるのだが、実際には Geschlecht という語をそこに見出すことはできない。その代わりに現れるのは「Art」である [2]。

> 個々の動物の個体［Individuum］における生の過程にはどんな Art［様式］の歴史［Geschichte］が見られるだろう？　Art［生物種］はいなかる歴史を持つというのか？　種とは現実的および可能的な個々の個体を包摂する単なる論理的な枠にすぎないのではない。種性格はむしろ生きているものの存在の一つの本質的な性格なのであり、このことはまさに、動物性の根本構造として私たちが学び知ったところのものに刻印されている［ausprägt］。そのものとはすなわち捉われていること、脱抑止の環を巡る取り組み合い、である。種への帰属性によって個々の動物の囲みの環は、種に帰属せず孤立していると仮定された場合よりもずっと広く張り巡らされているばかりでなく、種そのものもそのことで自分の環境に対してより一層庇護され、より一層優位に立っているのである。ではどんな歴史を種は持つのか？　動物界［Tierreich］全体はどんな歴史を？　そもそも我々は動物の存在に対して歴史などといったことを語ることができるのか？　できないとしたら、その有為転変をいかに規定すればよいのだろうか？ [3]

残念ながら、自ら提起したこうした問いにハイデガーがこれ以上深く立ち入ることはない。曰く、

---

[1] ジャック・デリダ『哲学のナショナリズム』藤本一勇訳、岩波書店、2021 年。

[2] Art（種）は、より上位の Gattung（属）や Ordnung（目）、Stamm（門）などとともにドイツ語における生物学の専門術語体系の一角を成している。

[3] Martin Heidegger, *Die Grundbegriffe der Metaphysik*, Gesamtausagabe Band 29/30, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1983, S. 386. また、「捉われ」や「脱抑止」といった存在論的機構の詳細については、串田純一『ハイデガーと生き物の問題』（法政大学出版局、2017年）も参照。

「有機体の本質規定という私たちの課題の中では、生きている物そのものの変動性格［Bewegtheitscharakter］への問いを、意図的に遠ざけておいた。しかし、この問いが決して任意のものでなくまた後から付け足すなどという仕方ではとても片付けられ得るものではないこと、そうではなくこの問いは生の本質への問いと最も内的に組み合わさっているということ、これらのことを示すには、生の最も内的な本質に属し、私たちが死として記し付けるあの契機を指摘すれば十分である」[4]。そして『存在と時間』におけるよく知られた論が繰り返されることになる。「生の根本構造としての捉われは、死の、死―へと―至ること［Zum-Tode-kommen］の、まったく特定の可能性を予描している。動物の死［Tod］は死ぬこと［Sterben］なのか命果てること［Verenden］なのか？　動物は、その本質に捉われが属しているゆえに、死ぬことはできないのであって、我々が死ぬことを人間へと割り当てる限り、動物はただ果てることしかできない」[5]。

このように、普段その構造に注意が払われることなく流通している諸現象を〈世人や人間以外の生物にも共通する存在者的・日常的な次元〉と見なした上で、その奥に〈人間的現存在のみが関わる存在論的・根源的な次元〉を見出し、この二つに別々の術語を与えるというハイデガーの一般的な仕草が、Art と Geschlecht においても、結果的に、働いていると言うことができそうである（そしてデリダも指摘する通り前者の語彙はラテン系、後者はゲルマン系となる傾向が強いが、Sterben と Verenden は共にゲルマン語であり、最も重要な Zeitlichkeit と Temporalität においては逆転が生じていた）。そしてこれによって――もちろん Art にもそれ固有の複雑な意味の拡がりがあるとは云え――Geschlecht が湛えている多義性が、とりわけ性別と生殖の問題が、表立たなくなってしまうのである。実際、まさしく「生の本質」に属しているはずのこうした現象に関してハイデガーは何も語っていない――つまり「現存在が性を持たない」のとは別の意味で生物一般の性も軽視されている――ように見える。少なくとも差し当っては。

「種」が存在論における根本問題の一つである以上、生物学においてもその「定義」が確立されているわけではないが、現在最も流通している暫定的な考えは、「それに属する健康で成熟した任意のメスとオスが交配した場合に繁殖能力を持つ次世代が生まれうるような全ての個体とその子孫の集合」といったものである[6]。つまり種は根源的に「可能性」や「仮想性」を抱えているわけだが、議論の場を整えるため、いささか煩雑だがまずは有性生殖という事象の基本を確認しておきたい。

まず、ある生物の生存に最低限必要な遺伝子（染色体）のセットはゲノムと呼ばれ、これはしばしば n と書かれる（ヒトのゲノムは常染色体 22 本と性染色体 1 本）。基本的にどの生物種の生活環（世代の一サイクル）においても、ゲノムを 1 セットしか持たない単相（n）の時期と、両親

---

[4] Ebd., 387.

[5] Ebd., 388.

[6] Mayden R. L. A hierarchy of species concepts: the denouemant in the saga of the species problem. In: Claridge M. F. , Dawah H. A. and Wilson M. R. (eds),1997. *Species: the Units of Biodiversity*. Chapman & Hall, London, pp. 381-424.

からそれぞれ 1 つずつ受け継いだセット[7]を持つ複相（2n）期とが別々に存在しており、後者の 2 つのゲノムには互いに微細な差異がある。そして単相の細胞が複相細胞から生成する際には、減数分裂という複雑なプロセスがとられるのだが、そこではまず、2 セット（正確には、前もってそれぞれが複製され倍加している）ある染色体の相同なものどうしが密着（対合）し、その一部分で乗り換え（交叉）が起こる。そしてこれらが次の（分裂して 4 つになった）娘細胞[8]に 1 セットずつ分配されることで、単相細胞は親世代のいずれとも異なるパターンのゲノムを持つことになる。

動物の場合、複相世代は多細胞のいわゆる個体、単相世代は単細胞の配偶子（卵子か精子）で、両者の違いは顕著である。しかし植物では、単相世代もまた本質的に多細胞で、生活環はより複雑になる。私たちが普通目にする大きな植物は複相で、これは単相の胞子を形成するため「胞子体」と呼ばれる。一方それら胞子のうち、適地へ飛散できたものは発芽して、単相の多細胞からなる「配偶体」へ成長し、この配偶体内に改めて造卵器・造精器が形成される。そしてそこで分化した配偶子（卵子と精子）が接合（受精）することによって複相の受精卵となり、これが成長して胞子体へ戻ることになる[9]。

この一般的なサイクルのもとで、脆弱な配偶体が胞子体の内部に住み込んで庇護される状態となっているのが、陸上の大半を占める種子植物である。その花粉はもはや――同種ないし近縁の――雌蕊の先（柱頭）でしか発芽できないが、それでも花粉はあくまで雄性胞子であって配偶子ではない。被子植物の花粉は核を 3 つに分裂させ、栄養核を持つ花粉管を伸ばして 2 つの精核（これが配偶子）を運び、雌蕊の根元に包まれた雌性配偶体の卵細胞と中央細胞をそれぞれ受精させる（重複受精）。そして両細胞はそれぞれ胚とその栄養源としての胚乳へと成熟するのであり、種子は既に複相の多細胞体である。

このように有性生殖とは極めて複雑な過程であり、単純な分裂や単為生殖に比べてコストとリスクの両面において短期的には非常に不利である。それにもかかわらずこうした仕組みが進化の「歴史」を通じて選択され存続してきた理由については、様々な考えがありうるが、以下の基本は維持されるだろう。即ち、組み替えや接合とは遺伝的多様性を能動的かつランダムに生成させるプロセスであり、それによって、未だ到来していない別の環境や新たな生存条件――それ自身絶えず変異し続ける病原体はその典型である――への適応可能性を広げることできる。これはい

---

[7] 植物ではしばしば 1 つのセット自体が倍数化して、四倍体や六倍体ないしはそれ以上ともなる。

[8] 最も近縁の単系統群どうしを姉妹群と呼ぶなど、生物学用語ではどちらかと言うと女性のジェンダーが優先しているように見える。

[9] 種によって、胞子段階で既に性別とサイズの差がありそれらから発芽した配偶体が各々造卵器か造精器だけを形成する場合もあれば、同型の胞子からできた一つの配偶体が造卵器と造精器の双方を持つ場合もある。シダ植物の多くは後者で、その配偶体は前葉体とも呼ばれ、非常に小さく繊細であり十分に湿った土壌や強すぎない光といった条件のもとで短期間生存することしかできない。しかし海藻では胞子体と配偶体のサイズや自立性に大差がない場合も多く、コケ類などは単相の配偶体の方が主体で、胞子体は配偶体に付着して一時的に発生するにとどまる。また、真菌類や単細胞の原生的生物もそれぞれ独特の核相交代と接合の様式を持つ。

わば、「現在的共時的な環境へではなく、未来的通時的な変化への、先回り的な高階の適応」であり、この事態は「己れに先立って諸可能性をあらかじめ企投する」という私たち現存在の在り方とも構造的に共通するのではないかとも思われるのだが、この点は置いておく。いま考えたいのは、ハイデガーの次のような言葉は事実上、有性生殖の効果を述べているに等しいのではないか、ということである。

> 有機体［Der Organismus］は、既に独自の或るものであってしかる後にさらに自分を適応させるということもする、のではなくて、逆である。有機体はそのつど或る特定の環境を自分にうまく嵌めこむのである。[10]

もしもここで言われている「有機体」を個体だと考えれば、ハイデガーの見方は科学と整合せず、目的論的でもあり、何よりも「脱抑止の環への捉われ」という動物個体に関する彼自身の解釈にも反する。しかし、この定冠詞付きの「有機体」はむしろ或る抽象的もしくは集合的なものとして考えることもでき、またそうすることによって今のような問題は解消するであろう。つまり、確かに生物個体は自分に行動様式を割り当てる「脱抑止の環」を担わされそれに捉われているだけなのだが、種という集団は或る範囲内の差異を帯びた複数の環を含んでおり、それらの個々が生成消滅しても、種という単位としては同一性を保ちつつ環境との関係を徐々に変化させることができるのである。

ただし、一般に子供世代の数は親（二個体）よりもはるかに多く、そして環境は常に有限なのであるから、有機体の種による「嵌め込み」には、その際にこぼれ落ちる個体たちの膨大な死があらかじめ組み込こまれているということにもなる（いわゆる寿命もその一端であろう）。これらを考え合わせると確かに、ハイデガーは或る面で一貫していると言うことができよう。先ず、彼は人間以外の生物における Art と Individuum の間に本質的な矛盾・相克を見出している気配がない。そしてそれは何といっても、「（人間以外の）生物個体が死を死として理解することはない」と断定していることの帰結であり、また根拠でもある。加えてこのことは、死を孕んだ多数性をもたらす雌雄の間の分裂・葛藤もまた、存在理解を刻印された人間という「崩壊した種族（Das verfallene Geschlecht）」に固有の事態だということを意味する。「崩壊した種族は分裂し、粉砕されてしまった（entzweit und zerschlagen）。この種族は、正しい打刻のなかで（in den rechten Schlagen）再び見つけ出すこと、自分を見つけ出すことがもうできない」[11]。

だがそうだとすれば、ハイデガーの所在究明［Erörterung］がトラークルの詩作に見出す次のような Geschlecht の運動は、むしろ非人間的な生命における亀裂なき種-性-個の存在様式（アート）へと回帰することであるようにも思えるのである。「正しい打刻が与えられるのは、自分の二重性（Zwiefache）が闘争的な不和から脱し、逃れ、遠ざかる（aus der Zwietracht weg）ようなゲシュレ

[10] Heidegger, Ebd., S. 384.
[11] Martin Heidgger, Die Sprache im Gedicht, in: *Unterwegs zur Sprache*, Gesamtausagabe Band 12, 1985, S. 46. デリダ、前掲書、93 頁。

ヒトにのみである。[…] この種族は、単一の二重性、襞なき襞の穏やかさや平和へと導くような移住運動のなかを進む（voraus）」[12]。そしてこうした揺らぎはまさしく、デリダの言う「散種／dissémination」の効果にほかならないのだろう。

> 私が散種という語を使用するのは、かつて私が特別視した単語へと事態を再中心化するためではない（その単語は再中心化だけは絶対に指さない）。それは、性的であると同時に系譜的な場面、つまり子作りと世代の舞台としてのゲシュレヒトという局面と、それよりも狭い言語上の問い、すなわち私が〈散種／多義性〉と呼ぶ不可能なカップルに潜む言語上の問いとのあわいにある、私が必然的と考える関係をいっそうよく出現させるためである。[13]

そうするとしかし、今度はデリダに向けても一つの問いを投げかけてみたくなる。それは、言う所の「dissémination」において散布されるのは、果たして単相の胞子／精子／花粉なのか、それとも複相の種子なのか、ということである。先に有性生殖の諸相をやや詳しく見ておいたのはこのためであった。確かに近代以前においては、ギリシア語の σπέρμα やラテン語の semen でも [14]、また大和言葉の「タネ」でも [15]そうであるように、男性の精（液）と植物の種子はたいてい同じ語で呼ばれ、概ね相同と見なされていた（これに対応して女性の腹は「畑」に喩えられた）。そしてデリダのテクストにおいてもやはり、両者はしばしば交錯しているのである。例えば「プラトンのパルマケイアー」から引くと、「したがっていまや、エクリチユールとパロールは二種類の痕跡、痕跡の二つの価値である。一方のエリチールは迷った［失われた］痕跡、生育力のない種子であり、精液において留保なく［貯蔵なく］浪費される一切のものである。それは生の畑の外で彷徨う力であり、産出力のない、立ち上がる［止揚する］能力のない、自己自身を再生させる能力のない力である。反対に、生き生きとしたパロールは資本に実りをもたらし、種子（セミネール）の力を父子関係なき享楽へと逸らせることはない。パロールはその種子の神学校（セミネール）において法を遵守するのだ」[16]。

もちろんデリダからすれば、このようなそれ自体の多様性こそまさしく dissémination にふさわしい行為遂行性（パフォーマティヴィティ）だ、ということにもなるのかもしれない。しかし他方で、遺伝情報（インフォメーション）――これは形相（フォーム）に極めて近接している――への雌／女性の対等以上の寄与 [17]が明らかとなっている

---

[12] Ebd., 同所。

[13] デリダ、前掲書、117-118 頁。

[14]「植物は、加工済みの栄養物を土から得るのであって、無用な余剰物［引用者注：排泄物］の代わりに「種子（スペルマ）」と果実をもたらす」（アリストテレス『動物部分論』第 2 巻第 10 章 656b、島崎三郎訳、岩波書店、1988 年、152 頁）。

[15]「落とし胤」や「皇胤」などの語句を参照。

[16] Jacques Derrida, La pharmacie de Platon, in: *La dissémination*, Paris, 1972, p. 176, ジャック・デリダ「プラトンのパルマケイアー」『散種』藤本一勇・立花史・郷原佳以訳、法政大学出版局、2013 年、245 頁。

[17] よく知られているように、X 染色体には生存や健康に必須の遺伝子も乗っているが、Y は基本的に雄化を導く情報しか持たず、このことが様々な遺伝性疾患と性によるその発生率の差をもたらす。

今日、semi- のもとで精（液／子）と種子を気付かぬうちに混合させることが、差異に潜む可能性を覆ってしまうような局面もあるのではないか。

精子のような単相の配偶子が散布されて生命をつなぎうるのは、同じないし近縁の種の異性配偶子と出会って接合が成立する場合のみであるが、それら配偶子はもとより寿命が短く、乾燥すれば即座に死ぬ。それに対し、既に接合を経ている複相の種子は多少の土壌と水および適当な温度のパターンさえあれば発芽する上、そうした条件に遭遇するまで相当の期間生きて待機することができる（単相でかつ或る程度の耐久性を持つ胞子は両者の中間と言える）。そしてこれら生物学的な現象が、「言語上の問いとのあわい」で何らかの「必然的な関係」を結んでいるのだとされる。おそらくは、撒き散らされた言葉のたどる遍歴が、当の言葉が帯びている種子性と精子性の度合いを、そして同時に散布先の無機性と有機性の配合を、事後的に開示するということになるのだろう。そして、既に触れつつある通り、この事態は他ならぬ dissémination という語自身にも生じている。

東方の漢字圏においては、〈夕べの国〉から飛び散ったこの語が降着した地点には「散種」という記号が生じる訳だが、これが既に存在していた単語に新たな意味が接合されたものか、それとも土壌から新たに生え出てきたものなのかは、必ずしも明確でない。原語の多義性に対応させるにはむしろ大和言葉の「タネまき」がより適しているようにも思えるが、いずれにせよ漢字の「種」が呼び込まれた時点で、種（しゅ）という別の一般的・抽象的な概念が重なってくる一方、semi- が孕む動物性は植物性によってほぼ覆われることになる。（禾偏は主にイネ科の穂である（こうしてまた禾が増殖する））[18]。

こうなると、ハイデガーの或る別のテクストにも言及せねばならないだろう。それは他でもない、論集『言葉への途上』の中であのトラークル論「詩における言葉」のすぐ次に収められている「言葉についての対話より」である[19]。ドイツ語を使う〈日本人〉と〈問う人〉の間で、言語が

---

[18] ハイデガーは Erörterung［究明］という語に含まれる Ort［場所］が元々は槍［Speer］の先端を意味すると指摘しているが（*Unterwegs zur Sprache*, S. 33、デリダ『哲学のナショナリズム』、50 頁以下参照）、この部位を指す大和言葉は「穂先」に他ならない。穂はまさに Geschlecht の諸力が集中して花や実が形成される切っ先であると同時に、散種の開始点として高く掲げられる場所でもある。現に、隠れていた事情、とりわけ性的なそれが公に知られることは「穂に出づ」と言われる（『古今和歌集』仮名序などを参照）。さらに、ほ、ほトラークルの歌う「精神［Geist］」は「炎」であるとされるのだが（ebd., S. 56）、「ほのお」は「火の穂」の転訛である（そもそも二つの「ほ」も同源ではないだろうか）。西から飛来してきたタネたちは、東の地で見通しのきかない錯綜した藪を茂らせている。

[19] Martin Heidegger, Aus einem Gesprach von der Sprache, in: *Unterwegs zur Sprache*, Gesamtausgabe Band 12, S. 79-146、高田珠樹訳『言葉についての対話』、平凡社、2003 年。この小編は、とりわけ日本の研究者にとって非常に貴重なテクストであるはずなのだが、必ずしも十分に研究が進んでいるとは言えない。その最大の理由は構造上の扱いにくさにあると思われる。というのも、この対話は決して現実に生じた事の記録などではなく、語り合う二人は共にあくまでも創作された人物であって、ハイデガー自身の思考や言葉は〈問う人〉だけでなく明らかに〈日本人〉の側にも浸透しているのである。しかも「対話」という形式の本性上、発言はしばしば相互の疑念や補足を受けて変転し、内容としてなかなか確定しない。読者・解釈者はいわば、多様な話題ごとに二人へ配分・散種される知と非知のモザイクを、そのつど戦略的に組み直す必要がある。この厄介なテクストを当然デリダも読んでいたはずで、読みの

持つ様々な力と困難を巡って行われるこの錯綜した対話は、次のやりとりで一つの頂点を迎える。

問う人　「Sprache」に当たる日本語の単語は何と言いますか？
日本人　（さらに躊躇ったあと）それは「こ̀と̀・ば̀」と言います。
問う人　いったい、それはどういうことを言っているのですか？
日本人　ば̀とは葉［Blätter］、またとりわけ花びら［Blütenblätter］を指します。
桜の花や梅の花を考えてみてください。[20]

「ば」に花を含めるのはやや異例かもしれないが[21]、いずれにせよ日本――あるいは東アジア一般――では、世界理解や存在論を担う語彙のシステムにおいて、植物性が卓越している。ごく大まかにそう言えそうではある。ただし〈問う人〉の次の発言が、この事態を再びヨーロッパへと折り返し、接ぎ木するだろう。「こ̀と̀から生い育つ花びら。このような語が言うことを始めると、想像力はつい未経験の領域の内へあちこちとそぞろ歩いて行きたくなります」[22]。

よく知られているようにハイデガーは『カントと形而上学の問題』において、「想像力／構想力［Einbildungskraft］」を存在理解の根源としての時間性と重ね合わせる大胆な解釈を展開しているが[23]、その際に拠り所とされているのが、「我々には知られていない共通の根から生い育ってくる、感性と悟性という人間的な認識の二つの幹」[24]というカント自身の表現であった。そして今、葉や花が問題となっている所で再び「想像力」が地表に現れて来るのは――テクストにおいては常にそうであるように――偶然のことではありえまい[25]。他ならぬ人間の（ないし一般に有限な）理性＝ロゴス＝言葉そのものの構造の図式として植物体が引き合いに出されてくるという事態、これはいったい何を意味しうるのだろうか。

「人間と植物の方がむしろ、人間と動物よりも、また動物と植物よりも、互いにより近い（ことがありうる）」という視点は、「最近類と種差」の階層的かつ連続的な構造から成るアリストテレス的な存在論のシステムを根本から撹乱する。確かに。しかし他方でこの視点は、超越論的すなわち特異な仕方で人間中心的たらざるを得ない近代の形而上学が持つ一面を、敏感に反映した

達人である彼の見解をぜひとも聞いてみたかったところである。

[20] Ebd., S. 134.

[21] とはいえ、花は「は̀な」である。そして「日本人」によるこの語釈が「やまと歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける」という『古今集』仮名序に連なるものであることは明らかである。

[22] Ebd., S. 138.

[23] Martin Heidegger, *Kant und das Problem der Metaphysik*, Gesamtausgabe Band 3, 1991.

[24] Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, A15, B29. ハイデガーはこの「知られていない根」を（超越論的な）想像力と見なすのである。「この［カントによる］根拠づけは、もしそれが置かれた根拠を単純に受け取るに止まらず、この根がいかにして二つの幹にとっての根であるのかを開示するならば、より根源的になるだろう。しかしこれが意味するのは、純粋直観と純粋思考を超越論的想像力へと連れ戻すこと以外の何ものでもない」（Heidegger, ebd., S. 138）。

[25] 心理学や人間学にも親しいという点で警戒を要する「想像力」をカントとの関連以外でハイデガーが使う例は他にほとんどないと思われる。

ものとも考えられる。つまりこの時代・世界においては、「人間は理性を持つ動物である」というよりもむしろ「動物は理性を欠いた（しかし快苦は持つ）人間である」と言う方が適切であり[26]、対する植物の側は、初めから理性を失う可能性すら持たないがゆえに、まさしく「非理性的ではない（そして快苦を問題としない）」という性格／述語を「（理念としての）人間」と共有しうるのである。別の面から言えば、動物性あるいは獣性を切り離した理性―ロゴス―言葉といえども「自らを保持して成長・繁殖する」という生命一般の「植物的」な基底を脱することはない。

もちろん、光合成や独立栄養といった植物特有の卓越した能力を知っている今の私たちは、〈単なる生存機能としての植物性が動物や人間をも包括する〉といった古代的な見方をもはや維持することはできない（植物を「生物を食べない生物」と再定義することもできるかもしれない）。しかしだからこそ、「まだ確固たるものとなっていない」[27]人間と植物との捻れた接触には、これから改めて実らせるに足る何かが胚胎されているに違いないのである。その可能性はハイデガーにもデリダにも摘み残されたまま、彼らが引く詩人たちの言葉のなかで静かにさざめいている。

魂は地上にありて余所者なり。
刈り込まれた森にかかる薄明は霊気を帯びて蒼みがかり、
長く鳴り響くは村の荘重な鐘の音、すなわち平和の伴侶なり。
死者の白きまぶたの上に、静謐な銀梅花が咲き誇る。

沈みゆく午後に水は声低く
湖畔の森はいっそう緑に燃え、バラ色の風のなかに喜びあり。
夕べの丘に響くは、兄弟の穏やかな唱歌。[28]

---

[26] この「保有可能性の内部での剥奪」こそまさに、ハイデガーが「（動物は世界が）貧しい」という形容に込めた含意であった。Vgl., Heidegger, *Die Grundbegriffe der Metaphysik*, S. 284ff. . そしてそれはさらに、アリストテレス『形而上学』（特に第 5 巻第 22 章）における「欠如」の分析にまで遡る。

[27] Heidegger, *Unterwegs zur Sprache*, S. 41, デリダ『哲学のナショナリズム』、82 頁。

[28] Ebd., S. 78, デリダ前掲書、242 頁。強調は引用者。トラークルの諸編はちょっとした植物図鑑のようでもあり、ハイデガーによって引用された部分だけを見ても、以下のような種名が見られる。「夜というヤグルマギク」「ケシに酔ったお前」「ヒヤシンスの如き声」「小径を覆うカシ」「銀のヤナギの枝」「ニレの木陰」「黄ばんだアシの歌」「揺れ動くアカマツ」……。